

# 復刊の辞

身延山短期大学々頭 松 木 本 興

大正の初め、未だ島智良上人健在の頃と記憶するが、本山納骨堂の一隅で手も顔も真ツ黒にした生徒の手に依つて  
謄写刷りのみすほらしい雑誌が発行された。是が棲神才一号であつた。内容は大部分が生徒の作文程度で埋もれて居  
て研究論文といふ様なものは見られなかつた。才二号から活字になり、是が才一号として方々へ配布されたが内容は  
前と交りはなく精々廿五・六頁のやはりみすほらしいものであつた。それが号を重ねるに従つて、学内で遠藤、高田  
永倉等の諸教授の執筆があり、学外からは清水龍山先生や、山川博士を初めとして諸龍象の寄稿もあつて、初めの学  
生の志操発表の機関としての目的が、いつの間にか学者の論場となり、学生側からは不満を持たれた様ではあつたが  
宗の内外からは重要視せらるゝ様になつて居たのが、戦争が苛烈になると共に学徒出陣、学徒動員といふ様な事で先  
生も生徒も戦場に工場に驅り立てられてしまひ、静かに想を鍊りペンを執る機会も無くなり棲神の発行も自然お流れ  
となつてしまひ、戦後の混乱時代は亦物資不足其の他の悪条件の爲に、心には思ひながら手を染め得なかつたのが、  
昨年開宗七百年の聖辰に当り、昭和定本としての御遺文才一卷の刊行成り。四海帰妙推進大法要虔修中身延山に於い  
て宗学研究大会が挙行せられたるを記念として、棲神を復刊する機運が生れ出で研究会の紀要と合本した事は、祖山  
の学苑としてはこよなき記念事業であると思ひます。

此処に過去を追懐すると同時に望みを將來に囑して復刊の辞と致します。

(開宗七百年太陰曆宗祖身延御到着の聖日に当り)